

## 《論文》

## ナチス治下のドイツ社会学

——シェルスキー、ケーニッヒ、ダーレンドルフ、ラムシュテット、  
レプシウスらの諸説をめぐって——

鈴木 幸 壽

一 はじめに

「連続か断絶か」(Kontinuität oder Unterbrechung)が社会学史上問われねばならない重要な課題であるとすれば、まさにドイツ社会学の歴史的展開過程においてこそそれが十分論じつくされねばならない。しかし筆者の知る限り、日本の社会学史の研究者は、遺憾ながらこの問題を積極的に研究の射程内に組み込むことをしていない。例えば学史の泰斗であった故新明正道博士のばあいでも、「ドイツでは第一次大戦直後特殊科学的社会学が勃興すると同時に、これに対抗して総合社会学や文化社会学も興り、社会学は未曾有の盛観を呈するにいたったものの、この全盛時代も1933年ナチスが政権を獲得すると共に終りを告げることになった」(傍点筆者)<sup>(1)</sup>と述べ、あきらかに一時的ではあれ完全に断絶状況におかれていたという認識に立っている。こうした認識は新明博士のみではなく、ナチス時代のドイツ社会学に多少でも触れるばかり、いわば通説として既定の事実であるかのようによびわられている。何ら疑問を差しはさまないまま、ナチス体制下にあつては、当然社会学の研究活動は全くおこなわれなかったという前提に立っている。こうした認識に立つ理由は、主としてユダヤ系社会学者(むろん社会学者のみではなく人文・自然・社会諸科学者も含んでいるが)がナチス体制の強権的反ユダヤ主義

(Antisemitismus)によって亡命を余儀なくされたことにあるが、確かに1920年代を飾った著名な社会学者、例えばK. マンハイム、T. ガイガー、M. ホルクハイマー、F. オッペンハイマー、T. アドルノ、R. ベンディックス、E. フロム、P. H. ラザースフェルドなどがアメリカ、イギリス、デンマークなどに亡命した。その数はドイツ社会学者で大学で教鞭をとっていた者の三分の二に及んだ<sup>(2)</sup>という指摘もあり、いかに社会学界にとって大きな打撃であつたかは想像にかたくない。

さらに個々の社会学者の亡命という事実と共に、「ドイツ社会学会」の組織解体と活動の停止状況から、ドイツ社会学の「空白状態」説を主張する研究者も多い。例えばハルトフィール・ヒルマン編『社会学辞典』の『ドイツ社会学会』(Deutsche Gesellschaft für Soziologie)の項には「1933年から45年まで学会は開催されなかった」<sup>(3)</sup>と記述されている。

このようにみえてくると定説とされている「ナチス治下のドイツ社会学」に関する評価としては、当然「閉塞」あるいは「死滅」と断じうるかも知れない。しかし単にこうした事実から早急な結論を引出し断定的評価を下すことは、「歴史には空白がない」とすれば、再考の余地は十分あるものとしなければならない。筆者は1978年、この問題についてかねてから疑念をもち『学鏡』に短文を寄せ、日本におけるドイツ社会学

史研究上の盲点あるいは重大な欠落部分ではないかとの指摘をした。<sup>(4)</sup>

M. R. レプシウスは「両大戦間における社会学の学史は、ナチスの政権奪取によって二つの時期に分けられる。このばあい第二期は、“ナチズム治下の社会学”と“亡命の社会学”という二重の特色を有する」<sup>(5)</sup>と述べているが、両者は一体のものであって、必ずしも二分する必要はない。しかし“亡命の社会学”についてはH. マウス、S. リーマーあるいはR. ケーニツヒらがすでに1959年にこれを採りあげ、先鞭をつけている。それだけ“亡命の社会学”については関心が高かったといつてよい。しかし最近になってからドイツではこの「ナチス治下の社会学」研究が急速に脚光を浴び多くの業績が発表されている。<sup>(6)</sup>本稿は、こうした研究に着目し、日本における「ドイツ社会学史」の欠落部分を補完し、通説化された認識に対してその是正を求めることに目的をおいている。このばあいすでに山本鎮雄教授によって入念な研究がおこなわれており、<sup>(7)</sup>同氏の数々の指摘はきわめて重視しなければならないし、また裨益するところも多いが、同氏の研究に付け加えるべきものがあるとすれば、その点に触れてみたい。なおH. シェルスキーによって、ドイツ社会学界における「連続か断絶か？」<sup>(8)</sup>の問題提起がその口火を切られ、R. ケーニツヒとの論争？<sup>(9)</sup>がおこなわれ、それが今日、主題についての研究を促進する引金になったことも付言しておきたい。さらに主題を研究するためには、ナチス治下以前、すなわちワイマール共和国時代のドイツ社会学についても当然触れておくべきではあるが、紙幅の制限もあり割愛せざるをえないことをお断りしておく。

## 二

主題を論じていくばあい、この「連続か断絶

か」という設問をめぐって、論者によってその時期の設定に相違のあることに注意しておかねばならない。それは具体的にナチス政権の存続期間、すなわち1933年から45年にわたる12年間にみられた現象として捉えていくか、それとも政権獲得直後あるいはその前にすでに断絶状況がみられたのかどうか、また逆にその時期に連続状況が認められたのかどうかという問題である。しかしこれはドイツ社会学者の研究活動の推移のなかで論者がいかなる判断を下すかによって異なっている。R. ケーニツヒは、80年代初期から主題に関して発表された文献をみる限り、そのモデルは四つに分類できると述べている。<sup>(10)</sup>すなわち第一はH. シェルスキーによって提示された終焉説<sup>(11)</sup>(=1933年以前すでにドイツ社会学は明らかに終焉し従って失うべき何者もなかった)である。これはケーニツヒが「1933年以降ドイツ社会学は完全に停止した」という見解に対するシェルスキーの反論であるが、かれはR. レプシウス宛の書簡という形式で書いた論文「西独社会学の成立史のために」のなかでケーニツヒ批判をおこなっている。<sup>(12)</sup>しかしケーニツヒは1930年から33年にかけてどの程度まで社会学の専門書をシェルスキーが読了したのか疑問であるとし、シェルスキー説はきわめて幼稚であるとの批判を加えている。<sup>(13)</sup>第二は1928年、チューリッヒで開催された第六回ドイツ社会学会議に、当時ハイデルベルク大学の私講師にすぎなかったK. マンハイム(1930年にはF. オッペンハイマーの後継者となる)がはじめて参加し、ドイツ社会学の新しい方向、すなわちかれの打ち出した社会学的テーマが「社会的現実に対する思考と認識の関係」というそれまでみられなかった文化社会学を樹立しようとしたことそのことが、ドイツ社会学の特殊性を物語っている。<sup>(14)</sup>従ってケーニツヒもマンハイムを称して「ヌーベルパーク的存在」とまで考

えているし、マンハイムも学会活動を28年以後活発化したという。第三はH. マウスとG. アイザーマン<sup>(15)</sup>らははじめとし、その後ケーニッヒ説を受けついでR. レプシウスによって継がれ深化されたテーゼが問題になっている。シェルスキーのいわばモットー「何もないところには何物も破壊されえない」というのがドイツ社会学なのである。従ってシェルスキーは「ドイツ社会学は不変」という立場に立つのである。第四は単純といえば単純あるいは原則論といえば原則論であるが、徹底して連続説から出発し、ケーニッヒ説に対立する論調である。

これらを整理すると一がシェルスキーの連続説、二がマンハイムを例証として挙げる連続説、三がケーニッヒらによる断絶説、そして四がストレートの連続説ということになって、連続説が優位に立つことになるが、果してそうなのだろうか。しばらくケーニッヒの所論をみることにしたい。かれは連続説を正当化する事実をいくつ挙げている。ナチスの政権獲得後刊行された社会学書（しかもナチスのいわゆる“御用学者”の業績ではなくて純粹の学術書）としてF. オッペンハイマーの著『社会学体系』(System der Soziologie) 四巻が1922年から35年までに刊行されているほか、A. v. シュルティンクの『マックス・ウェーバーの科学論』(Max Webers Wissenschaftslehre)『知識の社会学の限界』(Die Grenzen der Soziologie des Wissens) が1934年に、L. v. ヴィーゼの『一般社会学体系』(System der Allgemeinen Soziologie) の二版が1933年に発行されている。その他T. ガイガー<sup>(17)</sup>、A. ウェーバー<sup>(18)</sup>のものもある。こうした刊行実績に対してケーニッヒは「しかしながらナチス以前の時代から続けられた業績もやがて減少していることを認めざるをえない」し「主要な書物は次第に外国で出版されるに至った」と述べている。<sup>(19)</sup>したがってナチス治下での業績の

発刊も、社会学が公認の学問として存在しえたのではなく、いわば「国内亡命者」(Inner-Immigrant) に許された執筆活動にすぎなかったのではなかろうか。

ケーニッヒはここで改めてこうした社会学関係書の刊行について、その性格は純政治的意図をもつもの、そして他方で「連字符社会学」(Bindestrich-Soziologie) が多い点を指摘している。しかしケーニッヒはこのばあい「それら(連字符社会学)は社会学の支店であって、それ自体社会学ではなく、またそれらが理論的諸概念の統一的基礎から発生するということが示されない限り、それらの集積は社会学ではない<sup>(20)</sup>」と批判している。ここで刊行書物(含論文)を廻る問題とナチス治下の社会学とは何であったかという問題とが、「連続か断絶か」を解く鍵として論議の対象になってくる。とりあえず後者の論議について、次いで前者について触れていくが、もちろん両者は相互に密接に関連していることは否定できない。

### 三

ナチス治下にあっても社会学の学問研究を大学または研究所という組織内で(一部国内亡命学者を除いて)活動しえた学者はかなりの数にのぼっている。しかしかれらは一体いかなる研究をし、またそれが社会学の名に値するものであったかどうか。一般論としては、かれらに対する評価は低くかつ厳しい。それはナチス治下という特殊な政治状況では、本来的社会学の存立しうる可能性がきわめて少かった筈であるという認識に基づけば、当然のことであるからである。また1909年創設された「ドイツ社会学会」(Die Deutsche Gesellschaft für Soziologie 以下DGSと略す)のなかでの各社会学者の活動、さらに「ケルン四季報」の歴史とも無関係ではない。こうしたなかで、われわれの注目を惹く

のは、何といても H. フライヤーや W. ゾンバルトの動きである。おそらく両者とも日本の社会学史上ではナチス加担者というレッテルを貼られている。この両者のほかにもあまりなじみのない学者もいるが、紙幅の関係で触れないことにする。全体主義的かつ人種主義的体制が社会の科学的研究と理論的研究の貫徹を許さないというのが、どうやら断絶説のかなり有力な主張の一つになっているが、ここで例証すべき人物として1933年ないし34年の変革期に重要な役割を演じた H. フライヤーを挙げて考察したい。

かれの著名な『現実科学としての社会学』（1930）については、新明博士の『国民革命の社会学』（1935）に詳しいが、この書物の副題は『社会学体系の論理的基礎』（Logische Grundlegung des Systems der Soziologie）となっており、かれは20年代末期における社会学の内容を廻る論争にかかわるため本書を著している。ナチスの政権継承後『右翼からの革命』（1939）宣言でも、また社会学のプログラムの述作でも説明していることは、かれの社会学の概念がきわめて政治的プログラムに即したものであった点である。ということはこの時点で現代社会は「国家と社会」がそれぞれ独自に歩んでいくことを特色とするとの認識を有していたことを意味している。<sup>(22)</sup> 従って国家は、社会を構成する特殊利害に普遍として立ち向かうものなのである。社会学はあくまでこうした関係をリアルに画きかつ説明するところに始まるのである。これがフライヤーにとってみれば、市民社会の正当な解釈によって歴史的運動を隠蔽したり虚偽に導くなどのフランスおよびイギリスの社会学に比して優位に立つドイツ社会学のもつドイツ的遺産であったのである。フライヤーはここでもちろんあの L. v. シュタインを想起している。<sup>(23)</sup> しかし国家と社会は止揚さるべき対象

であり、現在および中期的展望ではなく、長期的展望での統一を志向すべきであって、フライヤーはこうした統一を社会学の科学性に基づく課題としている。

このようにみえてくると、フライヤーの社会概念は明らかにファシズム的であり、イタリアのムッソリーニ治下の標準的国家論と大差ないし、まさに右派ヘーゲル派的国家論でもある。ただこのばあいドイツ的「ゲマインシャフト」の本質は、資本主義的現実克服のためのドイツ市民階級の願望であり、この願望はいわゆる「青年運動」の広い範囲で、また出版者 E. ディートリッヒの活動のなかで賛美されている。<sup>(24)</sup> 考えてみると「ジンメル以来、というよりは正確にはヴィーゼやフィーアカント以来、ドイツ社会学においてテーマとなったものは社会化の形式的なメカニズムを発見しようとする試みであって、それは純粹に社会学の対象たりえなかった。フライヤーはこうした先学者の非歴史性をドイツ的思想の背景の後退、そしてそれらが本来の歴史的課題から逸脱しているがゆえに、最終的には反動保守主義とみなした」というシトゥルテングの指摘は正鵠を得ている。<sup>(25)</sup> 歴史的思考、また統一をもたらしゲマインシャフトにおいて、特別に“ドイツ的なもの”を知りうると信じたのが“ドイツロマン派”であるが、そのロマン派以来、非合理的・反民主的伝統が作られた。フライヤーはしかし、こうした伝統を必ずしも代表していたわけではなく、いわばかれの概念は、“ロマン派という織物の一部”としての知的流れではなかったろうか。しかしフライヤーはすでに1930年に〈ナチ党员〉の転換を上げていたとするシトゥルテング、またケーニツヒのように「かれ（フライヤー）は現在までずっと青年運動をおこなった人物としてナチ党员であった」と断定している。<sup>(26)</sup> ここで問題視されねばならないことは、フライヤーの“社会学”と

ナチスへの同調者としてのフライヤーの評価がどこで重なり、どこで弁別しうるかということである。後者からただちに、ナチス治下の社会学の存在が否定されるとすれば、フライヤーの“社会学”も当然その存在は否定されその延長線上には“断絶論”が現れることになる。

さて、ここでフライヤーをめぐるもう一つの問題がある。ドイツ社会学の研究それ自体の問題というよりは、ナチス治下においてDGSがいかなる変容を遂げたか、そこでフライヤーはどのような立場におかれ、どのように学会での動きを示したかという問題である。これは当然のことながら、ドイツ社会学の歴史を論ずるばあい不可避の要素である。DGSは1909年、M. ウェーバー、W. ゾンバルト、F. テンニエスらによって創設されたが、1912年 M. ウェーバーの「価値自由」の概念を廻ってかれらから袂を分かち、第一次大戦後の1919年 L. v. ヴィーゼが会長になり再建されたという歴史をもっている。1922年の学会には120名の会員が参加し、さらに1930年には R. ウォルムスの創設した「国際社会学研究所」(Institut International de Sociologie)にも加盟して活動している。しかしヴィーゼは「ドイツの国家的民族生活および国家生活の建設が一般的社会学の協力なしに為しうるかどうか」<sup>(27)</sup>と1939年の第八回大会で疑問を呈している。これはナチス体制に対抗してそれを拒否するということではないのではあるが、DGS そのものの活動はファシズム時代に中止しなければならなかったのである。何もかもヴィーゼを頼りにしていたDGSもいわゆる「民族勢力」(Völkische Kräfte)によって「対抗基盤という最終の脅迫」を身を感じ、当時の会長であった F. テンニエスは会長職を辞する用意がなかったために強制的に会長を辞職させられたのである。しかも新しい会長におさまったのが H. フライヤーであった。(「文部省の希

望に副うように」という強権力のバックがあつての会長というよりは、DGSの“指導者”<sup>フューラー</sup>への就任ということになる)。当初DGSはテンニエス、エッケルトそしてヴィーゼの三者による集団指導によっておこなわれることになっていたが、それは全く反故にされ、DGS内の新しい権力者たちによって牛耳られるに至るのである。

「多数決が政治的信頼を拒絶したとき、妥協はしなかったし、引き退るしかなかった」<sup>(28)</sup>とヴィーゼは述懐している。では新会長になったフライヤーは何をしたのか。1934年1月7日に社会学者会議がイエナで開催された。この準備は「ドイツ大学連盟」のなかの「ナチス科学教育局」の E. クリークとオブマンによってなされている。新しい権力者がDGSに対してどの程度直接的な影響力を行使できたかについては「全権を委任されたナチ黨員に学会の管理は委譲されている」<sup>(29)</sup>というヴィーゼの言によってほぼ想像がつく。DGSを思うままに動かしていたのはフライヤーに非ずして、法学者 R. ヘーン(ナチス親衛隊の国家安全局の局長、1936年から「ベルリン国家研究所」所長)であり、かれはDGSと国家勤労奉仕(Reichsarbeitsdienst)の連絡係として、またDGSの強制的画一化(Gleichschaltung)の推進者であり、DGSの業務に多大の影響を与えている。こうみていくと、フライヤーはまさにDGSの形式的指導者にすぎなかったのである。このイエナの大会以後の経過は定かでないが、フライヤーはDGSの活動を休止したことについて次のように述べている。「私が当初の試みに失敗したときわかったこと、それは、当時の政治体制下では学問研究活動が不可能であるということでした。学会に迷惑をかけないために学会を私は休止したのです」<sup>(30)</sup>しかしDGSの活動停止過程の歴史に光を当てようとする試みは最近とくに多くなっている。その例として「フライヤーは決してDGS<sup>(31)</sup>

の活動停止を意図したのではなく、A. ワルター、M. ルンプフ、ロータッカーそしてポエムと共に更に活動を継続したかったが、この計画は R. ヘーンに妨げられてしまった。というのはヘーンが会長になろうとしていたからである。<sup>(32)</sup>という M. H. ポエムの証言もある。しかしフライヤーは「DGS の証拠になるものは、1943年12月4日の連合軍のライブチヒ爆撃で失われてしまった」<sup>(33)</sup>とも言明しており、したがってオリジナルの記録文書を手がかりにして当時の DGS で起こった事柄を再現することは不可能ということにもなる。従ってシェルスキーが「1933年に権力を掌握したナチス体制が…DGS の無定形な活動停止を…こんなに無雑作に本当に受けとめたのだろうか」と疑問視するのもし正しいといえる。<sup>(34)</sup>ヴァイヤーに依れば DGS の活動は、自己の存在価値を保持するために敢えて（活動）停止をしたのかどうか、それが強制されたものかどうかは、正確に裏付けることはできない。DGS の活動は、ファシズムの権力者に対してももちろん三人（ゾンバルト、フライヤー、テンニエス）の共同指導を配して立ち向うことであった。にもかかわらず、DGS 内にはファシズムに共鳴する有力者がいたことは確かであった。これら権力者は、DGS の非存在（Nicht-Existenz）にもかかわらず、少くとも外国に対しては、ドイツの社会学者の立場を代表しているのだ、ということに努めた。1939年の秋ブカレストで「国際社会学研究所」（前出 IIS）主催の「国際社会学者会議」が開催される筈だったが、戦争のため参加を断らざるをえなかったとき“ドイツの研究の代表はまさにグロテスクな、完全に党派的な形態をもつなかで G. イブセン教授の〈指導〉下で準備された”<sup>(35)</sup>（ヴィーゼの言）。シェルスキーにいわせると、ヘーンと並んで G. イブセンは社会学の中では“先鋭分子”（Scharfmacher）であるときめつけると共に、

ファシズムに近い立場にある社会学者として両者のほか、K. H. プフェッファー、K. V. ミュラー、O. シュパン、フライヤー、J. プレンゲ、A. ヴァルターなどを挙げている。<sup>(36)</sup>このようにみえてくる限り、DGS は1933年以降確かに形式的に消滅したとはいえ、純粋な立場に立つ積極的な社会学をも有していたのではないかと見ることができる。DGS を現実にも動かす力をもっていたのは、むしろ「ドイツ法アカデミー」の学者たちであったことが明らかにされている。<sup>(37)</sup>ここでも、断絶説より連続説をとりうる余地があるといえる。

#### 四

「連続か断絶か」をめぐるドイツ社会学史論争が日本の学史研究においてほとんど無視されてきたことは上述のドイツにおける研究に照らして明らかである。ケーニツヒとシェルスキーの論争に端を発したこの問題は、さらに O. ラムシュテットの『1933年から1945年までのドイツ社会学』によって一層波紋を投げかけられた。むしろドイツでは「ナチス治下の社会学」研究は、50年代末に H. マウス（1959）、60年代 R. ダーレンドルフ（1965）、70年代末に入ってから関心が高まり、R. レプシウス（1979、1981）、C. クリングマン（1981）、U. イェギ（1983）、M. シュスター夫妻（1984）、O. ラムシュテット（1985）らの研究実績があり、これらと連関して大物の社会学者ケーニツヒとシェルスキーの論争が始められている。

ケーニツヒがシェルスキーの主題に関する問題認識に批判を加えていることは、ドイツ社会学史上注目すべきであるが、その最大のねらいは、シェルスキーを「社会学者」として認め難いとするケーニツヒの頑なな態度である。そこでシェルスキーのいわば追悼記念論文集ともいえる『社会学者そして政治的思想家としての

シュルスキー』(Helmut Schelsky als Soziologe und politischer Denker, O. ヴァインベルガー, W. クラヴィエッツ編 1985)<sup>(38)</sup>を手がかりに、とくに「ナチス治下のシュルスキーとドイツ社会学」について見ていくことにしたい。このばあい直接シュルスキーとナチズムに関連した論文はG. モゼティチによって書かれた「社会学, この不幸な科学—ヘルムート・シュルスキーの社会学批評考—」<sup>(39)</sup>である。モゼティチは元来「社会学史」は無視できない社会学の専門分野の一つであることを認識し、社会学者仲間が挙って専門とする社会学の過去に思いをいたすことがあり、西独のばあいもごく最近二度ほど社会学の発展状況を明らかにしようとする試みがみられたことに注目している。その一つはDGS創立50年目に当る1959年に出版されたシュルスキーの『ドイツ社会学のおかれている現況』のもつ意義であり、他の一つは1979年から81年にかけて、(1918年以来の)ドイツ社会学の道を再構築し、独自の立場を確立するための動きを示しはじめたことである。この立役者がシュルスキーである。すなわち1959年の著書と1981年に出版された『ある〈反社会学者〉の回顧』が一体となって「ドイツ社会学論」を形成したことになるのである。シュルスキーにとって、学史の再検討は、社会学に加えられている多くの批判のなかでも、とくに「ナチス治下社会学」をめぐる問題として問われねばならなかった。「シュルスキーがドイツ社会学に与えたドイツファシズムの影響のなかで、専門的歴史叙述における支配的解釈のための〈最大の秘密刑事裁判〉(Fe me)<sup>(40)</sup>を行ったがゆえに、またその後の社会学の発展像が全くナチス的〈転轍〉の解釈に依存しているがゆえに、ナチス時代という時代の社会学の危機的形相を採りあげるのである」<sup>(41)</sup>とモゼティチが述べているが、こうした問題意識の下でマウス、レプシウス、そしてケー

ニッヒがそれぞれの立場から批判を加えたのである。<sup>(42)</sup>三者共通にみられた評価は否定的であり、当然「断絶説」を代表することになっているが、前述のようにシュルスキーは「不正確かつ社会学的に十分検討されていないし、自己偽瞞である」と決めつけたのである。然らばシュルスキーはどのように考えていたのだろうか。曰く「われわれの社会学のテーマの扱い方はこの時(ナチス勃興時)までに終わった。メロディは最後まで演奏された。前線は硬直状態である。学問はほとんど新しい発展力をもたなくなった。このような状況がナチズムの活動を開始させるドイツの社会的政治的状況にふさわしかった。」<sup>(43)</sup>シュルスキーのこうした判断を納得的に証明するためかれは続けて次のように述べている。「30年代の初頭には、ほとんど重要な社会学関係書の出版がなされていなかったのではなく、すべて重要な見解はすでに練りに練られていたのである。しかしとくに顕著と思われることは、辛じて亡命したドイツの社会学者のうちの一人(シュルスキーはK. マンハイムを指している)が外国に在って社会学を更に研究したが、ほとんど他の社会学者は科学観と社会学の根本テーゼを急激に変えてしまったのである」<sup>(44)</sup>

しかしこのようなシュルスキーの分析によって30年代初期の社会学的業績を明らかにすることはかならずしもできないし、さらにシュルスキーが、どのように、またいかなる規準に基づいて否定的な判断を下したかは説明つかない。これに対してケーニッヒが明白な反対のテーゼを提唱し、説得力をもつ論議を展開したのは当然かも知れない。ただケーニッヒのばあいは、社会学そのものではなく、テンニエスとヴィーゼによって運営されていたDGS(有力者のメンタリティと大御所としての大学教授スタイルが交り合ったかたちで、新しいイデーや精神的思潮の展開する可能性の少なかった学会)を採り



あげたに止まっていたといえる。他方ケーニッヒは当時のドイツ社会学の革新的潜在力については全体として高く評価している。とりわけ K. マンハイムが30年代に、限られた範囲内であれ印象付けるに足る人物となり、社会学に活気を与えたこと、また初期マルクスの著作刊行に関連して新マルクス主義的思想が強化されたこと、これと並んでフランクフルト学派やオーストリア・マルクス主義、個人としては T. ガイガーや N. エリアス、ウィーンの経済心理学研究所、A. シュッツをかなり評価しており、ドイツ社会学は観方を変えれば、現時点(ナチ体制)では問題が多いものの、革新段階のはじまりに立っているといった認識すらもっていたのである。ケーニッヒの理論的概念、また方法論的にみて十分熟慮を加えられた経験的社会研究の萌芽といったものは、確実にドイツ社会学に対して強力なショックを与え得ただろうと考えられる。しかしシェルスキーの「〈20年代のドイツ社会学の内的終焉〉という自己のテーゼに対してみずからそれを十分証明していないし、さらに(前述のように)ほとんどの外国亡命のドイツの社会学者が科学観と社会学の根本テーゼを急に変えてしまった、とすることの証明もなされねばならない<sup>(45)</sup>」という指摘もある。総括的に見れば、このようなシェルスキーのテーゼに対し、真剣になってそれを弁護しえないといわざるをえない。ここには、はしなくも亡命社会学者の評価の問題が出ているが、ここで亡命学者を「出エジプト記」になぞらえたダーレンドルフの所説を瞥見しておかねばならないだろう。かれは次のように述べている。「ドイツ社会学の〈出エジプト記〉が国際的研究にとって何を意味するかは二つの主題に分けて考えることができる。外国、とくにアメリカにおいては、ドイツの亡命者の寄与によって社会学は驚くほどの隆盛をみた。研究の先頭に立って活躍した学者はつね

に、かつてのドイツ時代の姓名を使っている。他方ドイツでは(比較するのはきわめて困難なのだが) 今日なお1933年の状態まで到達してはいないだろう。<sup>(46)</sup>」このようなダーレンドルフの極端な反対のテーゼは、シェルスキーのいささか劣等感をもつかの如き主張に比べれば、こう言い切るだけの明確な論拠が提示されていないだろうか。シェルスキー自身は、両大戦間に彼なりの精神的自己形成を経験したし、彼より上の世代の若干の社会学者を尊敬してはいるが、1945年以前のドイツ社会学の業績のすべてを、本質的には社会学の単なる前史とみなしている。しかしシェルスキー自身、単にドイツ社会学の古典や「20年代の社会学者を扱った具体的な問題性が今日消えうせた<sup>(47)</sup>」と主張しただけでは決してドイツ社会学の主題の連続性を説く彼の主張を承認するわけにはいかない。産業社会、資本主義、デモクラシー、社会的階層といった諸問題を探りあげている多くの社会学的研究に想到すれば、それら諸問題が解決を迫られている時代において起っているだけに、シェルスキーのこうした認識は決して賢明ではない。シェルスキーに依れば、ドイツにあっては、20年代、30年代には、さまざまな形式の「主義社会学」(Gesinnungssoziologie)<sup>(48)</sup>が優勢であったし、戦後消滅してしまったが「ユートピア的—健全な良心的イデーと秩序観を伴う熱狂<sup>(49)</sup>」がみられた「ドイツ社会学のイデオロギー的局面<sup>(50)</sup>」についてもシェルスキーは言及している。戦前の社会学についての極端な脱科学化と1945年後の西独社会学の脱イデオロギー化という極端な見解とが、シェルスキーの場合いわば交信し合っている感が強い。どうやらこの双面的解釈はシェルスキーの生活史から生じた体験世界の反映であるかも知れないし、ドイツ社会学の発展を示す十分な姿を提示できなかったのかも知れない。またかれは自己の判断を貫徹しえなかつ



たのではないか。例えば「20年代の広範な産業社会学的研究」<sup>(51)</sup>を高く評価している一方「20年、30年代に『社会誌学』(Soziographie)という名称でドイツで研究された〈経験的社会研究〉が豊かに展開された」<sup>(52)</sup>、という指摘もある。シェルスキーは、20年代30年代のドイツ社会学に対して消極的な判断を下しているかにみえるが、決してそうではない。というのは、M. R. レプシウスが、かれのテーゼを無視したり、ケーニッヒの視程を無批判に受け入れたことに対してレプシウスを非難しているからである。<sup>(53)</sup>このことが実は再びケーニッヒから激しい抗弁を招来したのである。「社会学的歴史の意味であきらかに欠陥をもつシェルスキーの議論」<sup>(54)</sup>は前述したが政治的に単眼的であり、「ナチズムの破壊力のもつ役割を過少評価したのみならず、かなり解釈にずれがある」<sup>(55)</sup>というわけである。ケーニッヒはこうした批判を加えることによって、シェルスキーの社会学史叙述の弱点を鋭くえぐり出したといえることができる。期せずしてケーニッヒとシェルスキーの間に見られた論争は、必ずしも結着のつかない問題かも知れない。シェルスキー亡きあと、ケーニッヒは論敵を失ってしまったが、最近(1987)『ドイツにおける社会学』(Soziologie in Deutschland)を著わし、その序文の冒頭で次のように述べている。「ドイツ社会学に関する諸論文は、過去五十年間に発表されたものから選んだものであり、戦後のドイツ社会学のなかで自分の立場を明らかにすることと、若干の重要な私に対する誤解、とくに最近亡くなった H. シェルスキーによって提出された誤解をとくことの必要があつてのことである」<sup>(56)</sup>(意識)。しかしケーニッヒはシェルスキーがもはや「論争には加われなくなってしまったものの、おそらく(私の)こうした問題提起に対してそれを無視するであろう」<sup>(57)</sup>(意識)とさえ述べ、何か仇敵視する姿勢をくずしてはいな

い。ともあれ両者の関係は決して融和することはないとみられるが、ここでいささか前に指摘したラムシュテットの著書が刊行され、ケーニッヒ説を批判したことについて、ケーニッヒの諸説を述べることに転じてみたい。

#### 四

ラムシュテットに対するケーニッヒの批判の最たるものは、この著作がいわば「こけおどし」的であるという指摘である。しかしケーニッヒの批判は同じ問題について U. イエギラ<sup>(58)</sup>に対してもすでに向けられている。「ナチズムの思考像を社会科学において模索しようとする様々な試み以外に、最近、ナチズムの社会学の文献目録を作成しようという顕著な傾向が見られる。かくしてナチズムの社会学の存在の擁護者はその〈内的結果〉を証明し、この新しいスタイルの思考像を再構築しようとしている。これは折にふれて U. イエギによって著わされた場合、そして社会科学においてナチズムを讃美するためではなく、ナチズムの思考様式を経験主義、政治的実存、実践関係、民族結合、人種関係を融合しながら構造的にその特質を明らかにすることだけにあるといった場合である。」<sup>(59)</sup>こうした研究の最先端の研究者としてラムシュテットが挙げられるが、かれは1984年に書いた論文と1986年に著した書物によって、社会学のナチズム的ヴァリエーションを興味深く強化しようとしている。しかしケーニッヒに言わせると、かなりの水準に達しており、これまでのこの種の研究としてはすぐれた面をもってはいるが、いささか問題なしとしないのである。1984年の論文(原稿に止まっている)の最も重要な特色は、思考像の記述、すなわちその立場はナチズムの社会科学に専念する立場である。例えば M. ウェーバーの人種主義とは異なって、一方で歴史的実存主義的な政治的实践に向かう行為理論に立つ

階級的性格をもつこと、他方きわめて幼稚な形式をもつ人種主義的性格をもっている。このような人種論は「単なる定り文句のようなもので、例えば A. ヴァルター（1927年から44年までハンブルク大学の教授、比較民族社会学、社会集合心理学、大都市社会学を専門分野とする）がベルリン大学の W. ツィーゲンフスを評して、“かれはエッセンに生れてドレスデンで成長したが、ザックセン訛りがはっきり聞きとれる”〈リュネブルクの丘の出身の金髪の巨人<sup>(61)</sup>とするような単純な人種論である。<sup>(62)</sup>とケーニヒは批判し全く無視している。

その他ラムシュテットが見落していることをケーニヒは随所で指摘しているが、とりわけ批判を加えたのは、ラムシュテットの挙げた文献の量、その質についてである。確かにラムシュテットは412頁にわたってナチス時代のドイツ社会学の研究を纏めてはいる。しかし本文は半分にも満たない168頁にとどまり、244頁を文献に当てている。（正確には「第三帝国における社会学文献」として222頁）。ケーニヒはこれを称して「単純なエンピリツィスムス<sup>(63)</sup>（primitiver Empirizismus）と揶揄している。

本来エンピリツィスムスは、理論的に照出された経験を基礎にして固めらるべきであるにもかかわらず安易に掲載しているというのである。むろん、単にナチズムに左袒的な文献を扱ったのではないにしても、約4200というぼう大な文献である。しかもドイツ以外で発刊されたり発表された論文、例えばオーストリア、チェコスロバキア、オランダ、スイス、デンマークなどのものは全く排除されているのはどうしたことか、とケーニヒは M. ヤホダと H. ツァイゼルのことを例示している。両者による書物は現在では古典になってしまったが、経験的社会調査の成果である『マリーエンタールの失業者』が1933年ウィーンで出版されている事実、また単

に経済学研究としてではなく、社会科学研究を行ったオーストリア学派に属するオーストリアマルクス主義者の業績も洩れているのはどうか。ということになると、一体誰がこの文献を作成したのか、どのような意図の下に選択されたのかに疑念をもつと手厳しい批判を加えている。ラムシュテットに言わせると、この文献目録は1933年から45年まで、社会学者の目にとまらなかった文献を集めたのであるが、むろんこれの中に不完全なもの、さらには不必要なものが含まれていることを否定はしていない。ただ日本の社会学史研究者の目から見る限り、その内容は一応問わないという仮定に立てば、驚くべき事柄であることは間違いない。完全な空白と断定したことが、いかに学史研究にとってマイナスになっている（いた）かは想像に難くない。

紙幅も限られているので、主題にかかわる問題としよう一点挙げておきたい。それは1934年夏から1935年初頭にかけて E. E. ユーバンク（Earl Edward Eubank）がヨーロッパの社会学者を歴訪してインタビューを行った際、ドイツでも当時の著名な社会学者に逢っており、その記録に基づく限り、それらが主題とどうかかわるかという、一見科学的でないと思われるが、やはり無視できない資料価値があるので触れておきたい。このユーバンクのインタビュー記録については、残念ながら筆者は入手していないので、ラムシュテット、ケーニヒ、そしてケスラーなどの文献からのいわゆる孫引きである。先ずケスラーのばあいであるが、かれは「初期ドイツ社会学の知識社会学的分析の次元」として社会形態、イデオロギー形態、環境を設定し、これらとユーバンクのインタビューの四つの目標との関係を比較対照することによって、当時の社会学者のもつ有力度を計ろうとした。四つの目標とは(1)社会学者と個人的に知己にな

ること(2)そのことによって社会学者の生活と業績について直接情報を入手すること、(3)各国の当時の社会学の状況およびその代表者についての情報を入手すること、(4)ヨーロッパの社会学の発展史と現況についての包括的な概観を得ることであった。ケスラーが注目したのは第三の目標であり、質問と答とからランキングを行うというユニークな方法である。ユーバンクがインタビューしたドイツの社会学者は、H. フライヤー、F. オッペンハイマー、W. ゾンバルト、F. テンニエス、A. フィーアカント、E. フォーゲリン、A. ウェーバー、L. v. ヴィーゼの8名であった。例えばフライヤーの挙げた社会学者はマルクス、ラッツェンホーファー、ジンメル、シュタイン、テンニエス、シュパン、フィーアカント、M. ウェーバーであるがこのようにして8名の社会学者がそれぞれ挙げた社会学者の点数によって、重要視されていた社会学者を決定しようとしたのである。ケスラーはレプシウスの作った学会への参加度(1910~1930)とこの結果を合わせて、当時の社会学の最有力者(5名)有力者(14名)比較的有力者(14名)そして有力者と思われない者(16名)に区別している。ちなみにその結果によれば、最有力の社会学者は、オッペンハイマー、ゾンバルト、テンニエス、M. ウェーバーとヴィーゼである。従ってケスラーのばあいは特異な研究の資料としてユーバンク・インタビューを利用したといえるが、ナチス治下における社会学の問題を全く避けているわけではない。<sup>(64)</sup>

ケーニッヒのユーバンク・インタビューはどうであろうか。エピソード的ではあるが、シュパンとの対話で、「ドイツで最重要な社会学者は誰ですか」との間に(皮肉か自信があつてのことかわからないが)笑いながら「私ですよ」と答えた、という。(この点についてはケスラーも触れている)。ケスラーの叙述のなかでユーバン

クとフィーアカントの対話が記されているが、ゲッベルス(ナチスドイツの宣伝相)の話には不快感を示したが、ヒトラーについては「きわめて積極的」(sehr positiv)(と評価した)という。マンハイム夫妻はヒトラーについては何と「私達は彼が好きです」(We like him)といったという。これにはユーバンクも驚いたらしい。テンニエスは「困惑している」と答えている。ケーニッヒはケスラーの要領よい記述を採りあげ全文を引用している。それは次のような分析記述である。「ナチス党員の支配による政治的科学的体制のラジカルな変化に対して示した著名なドイツの社会学者の〈反応〉のスペクトルをユーバンクとの対話を手掛りとしてみると、かなり集約できる。〈「困惑」(テンニエス)、〈悲観主義〉(ゾンバルト)、ヒトラー個人に対する積極的表明(マンハイム、フィーアカント)、行き過ぎという判決が些細なこととみるか(フィーアカント、フライヤー)」ということになる。決して不真面目な所見ではない。唯一オッペンハイマーの反抗的反応がこの範型の例外である」<sup>(65)</sup>こうした個々人のナチ体制に対する(率直あるいは本音かどうか疑わしいことは確かであるが)意見の表明が、社会学のナチスの転換に至ったのか、空白期間の到来とみるか、はたまたドイツ社会学のナチ体制以前からのいわば運命なのかといったことと全く無縁ではないであろう。紙幅の関係でラムシュテットのユーバンク論には触れられないが、次の機会に譲りたい。

## 五 終りに

本稿はこれで完結したものではない。最近西ドイツで主題に関する問題への接近がきわめて多くなり、また多彩をきわめているために、本稿程度の叙述では到底十分な研究をなしえたいと思われないからである。ただ日本における「ドイツ社会学研究」が、はじめにも記しておいた

ように、甚だ不備であるという現況に対して、多少の刺激を与えることができればという願いをこめて、ごく概略的に述べたにすぎない。ナチズム体制といったものの本質、さらにはそれに先立つワイマール時代、そしてドイツ市民社会の成立期から受け継いだもの、そうしたものの密接なかかわりがある以上、本稿の主題を扱うにあいには、実はおそろしくその範囲の広いこと、そして奥深さを有していることに今更ながら驚いているというのが偽わらざる筆者の感想である。これからこれらをふまえながら、より精緻な研究が為しうれば…とひそかに思っている。最後に、本稿は、昭和62年度「日本証券財団」の「学術奨励金」による研究の一部として発表したことを付記しておきたい。

(1987. 11. 8 脱稿)

#### 註

- (1) 新明正道『社会学史概説』176頁、岩波全書、1954.
- (2) M. Rainer Lepsius, Die Entwicklung der Soziologie nach dem Zweiten Weltkrieg 1945 bis 1967, in Günther Lüschen (Hg), Deutsche Soziologie seit 1945. *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, Sonderheft 21 (以後 KZfSS と略す) S. 17, 1969.
- (3) Hilmann/Hartfiel (Hg), *Wörterbuch der Soziologie*, S. 137, 1972.
- (4) 拙稿「ナチス治下の社会学」『学燈』, 1978年9号, 丸善, 18頁.
- (5) M. Rainer Lepsius, Die Soziologie der Zwischenkriegszeit: Entwicklungstendenzen und Beurteilungskriterien, in M. Rainer Lepsius (Hg),
- (6) Soziologie in Deutschland und Österreich 1918-1945, *KZfSS*, Sonderheft 23 S. 8. その他亡命社会学者については Ottheim Rammstedt, *Deutsche Soziologie 1933-1945*, 1986. Sven Papcke, Soziologie in Deutschland, in Papcke (Hg), *Ordnung und Theorie—Beiträge zur Ge-*

*schichte der Soziologie in Deutschland*—1986. Soziologie und Nationalsozialismus? *Zeitschrift für sozialwissenschaftliche Forschung und Praxis*, in "Soziale Welt", 84 Heft, 1/2 などあり。英文の研究書としては Laura Fermi, *Illustrious Immigrants* 1968. Donald Flemming & Bernard Bailyn (ed), *The Intellectual Migration* 1969. H. Stuart Hughes, *The Sea Change*, 1975. Franz L. Neumann, *The Social Sciences, in The Cultural Migration* 1953. Robert Bogens, (ed), *The Legacy of the German Refugee Intellectuals* 1969. その他フランクフルト学派のアメリカでの活動。また主題そのものではないが René König, *Leben im Widerspruch, —Versuch einer intellektuellen Autobiographie,—*1980. *Soziologie in Deutschland—Begründer, Verächter, Verfechter*—1987. Joseph Hülsdenker und Rolf Schellhase (Hg), *Soziologiegeschichte*, 1986. Erhard Stölting, *Akademische Soziologie in der Weimarer Republik*, 1986.

- (7) 山本鎮雄『西ドイツ社会学の研究』1986.
- (8) Helmut Schelsky, *Ortsbestimmung der deutschen Soziologie*, 1959. また René König, Zur Entstehungsgeschichte der bundesdeutschen Soziologie, in *KZfSS*, 32. S. 417-457, 1980.
- (9) René König (Hg), *Soziologie* (Erster Aufl.) S. 14, 1958.
- (10) René König in, Kontinuität oder Unterbrechung—Ein neuer Blick auf ein altes Problem — S. 388f. 1987. *Soziologie in Deutschland*
- (11) Helmut Schelsky, Zur Entstehungsgeschichte der bundesdeutschen Soziologie, Ein Brief an M. Lepsius, in *KZfSS*, 32 Jg. 1980.
- (12) H. Schelsky. 1959, S. 36f. ケーニッヒの終焉説に対して「今日的には通用する考え方であるが、にもかかわらず不正確であり、社会学的に考えられないし、自己偽謊である」という。(11)文献に再録されている。S. 420.
- (13) René König, a.a.O. S. 338.
- (14) Erhard Stölting, a.a.O. S. 119f.
- (15) Heinz Maus, Bericht über die deutsche Soziologie 1933-45, in *KZfSS*, Bd. 11, 1959.
- (16) Gottfried Eisermann, Die deutsche

- Soziologie im Zeitraum 1918-33, in *KZfSS*, Bd. 11.
- (17) Theodor Geiger, ケーニッヒが挙げている著書に *Erbpflege* 1934 がある。
- (18) Alfred Weber, *Das Tragische und die Geschichte*, 1943.
- (19) René König, a. a. O. S. 389. 具体的にはオーストリア, スイス, オランダ, スカンディナヴィア諸国, チェコ。König の *Machiavelli* も1940年にZürichで出版されている。
- (20) René König, a. a. O. S. 389f.
- (21) 名を挙げるとすれば, Andreas Walther (1879-1960), Richard Thurnwald (1869-1954). Hans-Lorenz Stoltenberg (1888-1963) Arnold Gehlen (1904-1976).
- (22) Hans Freyer, Gegenwartsaufgabe der deutschen Soziologie, in *Zeitschrift für den gesamte Staatswissenschaft* 95. 1935 S. 116ff. 及び Volkwerdung. Gedanken über den Standort und über die Aufgabe der Soziologie, in *Volks-spiegel* 1. 1934, S. 3f.
- (23) a. a. O. (Gegenwartsaufgabe...) S. 118ff.
- (24) Freyer の Jugendbewegung については, Elfriede Üner, Jugendbewegung und Soziologie-Wissenschaftssoziologische Skizzen zu Hans Freyers Werk und Wissenschaftsgemeinschaft bis 1933-, in R. Lepsius (Hg), *KZfSS*, Sonderheft 23, 1981 に詳しい。
- (25) Eberhard Stölting, Kontinuität und Brüche in der deutschen Soziologie 1933/34, in *Soziale Welt* '84 Heft 1/2 S. 51. Freyer の批判は *Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft*, S. 57ff, S. 179ff 参照。
- (26) René König, Über das vermeintlichen Ende der deutschen Soziologie vor der Machtergreifung des Nationalsozialismus, in *KZfSS* 36. S. 382. (25) Kontinuität... も参照 S. 407.
- (27) Leopold von Wiese, Erstes Vorwort, in *Verhandlungen des 8. Soziologentages*, 1946. S. 3.
- (28) L. Wiese a. a. O. S. 4 及び Alex Emmerich u. v. Heydt, *Die geistige Spannung innerhalb der modernen katholischen Soziologie* の中で「Freyer の指導の引継ぎを, DGS の活動停止意図にむすびつけることは常に論議的になっていくが, これは“Akademie für Deutsches Rechts (ドイツ法学アカデミー)”への言及を見究めることでもある」との説もある。
- (29) *ibid*, S. 4.
- (30) Christian L. M. Eckert. Leopold von Wiese, Ein Bahnbrecher für ein streng wissenschaftliches Verfahren in der Soziologie. in K. G. Specht (Hg), *Soziologische Forschung in unserer Zeit, Ein Sammelwerk, Leopold von Wiese zum 75 Geburtstag*, 1951 S. 340ff.
- (31) この他, 学会の活動停止については, v. Wiese a. a. O. S. 4, R. Lepsius, in Lüschen, a. a. O. 1979 S. 29ff.
- (32) Michael Neumann が J. Weyer (Westdeutsche Soziologie 1945-1960 の著者) に伝えたところによると, Max Hilbert Boem が1933-34 の出来事として述べたという。J. Weyer 同上書41頁注。
- (33) Freyer の Ch. L. M. Eckert 宛書翰 1947.
- (34) H. Schelsky. (11) a. a. O. 1981. S. 25.
- (35) Johannes Weyer, *Westdeutsche Soziologie 1945-60 -Deutsche Kontinuitäten und nordamerikanischer Einfluß-1984*. S. 42.
- (36) H. Schelsky. (11) a. a. O. S. 43ff.
- (37) Dirk Käsler, *Die früh deutsche Soziologie 1909 bis 1934 und ihre Entstehungsmilieus -Eine wissenschaftssoziologische Untersuchung-* 1984. S. 525.
- (38) 本書は1984年4月18日に行なわれた「社会学者そして政治思想家としての Helmut Schelsky」というタイトルのミュンスター大学でのパネルディスカッションをまとめたもの。この会議はミュンスター大学法哲学研究所と国際法・社会哲学協会の共催であった。
- (39) 論文名, Gerald Mozetič, “Die Soziologie, diese unglückliche Wissenschaft...” Überlegung zu Helmut Schelskys Kritik der Soziologie, タイトルは Schelsky の Rückblick eines “Anti-Soziologe” 1981 からとったもの。
- (40) フェーメ 中世にヴェストファーレンで行なわれた犯罪を扱う秘密裁判。14世紀以来ドイツの他の地方にも及んだという。

- (41) (38) a.a.O. S. 25.
- (42) H. Maus, a.a.O. S. 72-99 及び R. Lepsius, a.a.O. S. 25-70, R. König (Hg) *Soziologie*. 1958 1. Aufl.
- (43) H. Schelsky. (8) a.a.O. S. 37.
- (44) H. Schelsky. *ibid.*
- (45) Gerald Mozetič. (38) S. 28.
- (46) R. Dahrendorf, *Soziologie und Nationalsozialismus*, in *Pfade aus Utopia, -Arbeiten zur Theorie und Methode der Soziologie*-1968, S. 92.
- (47) H. Schelsky. *ibid.*, S. 30.
- (48) H. Schelsky. *ibid.*, S. 42. ここでは次のような文脈で述べられている。「主義社会学」(Gesinnungssoziologie)は社会的現実の中でその本源を失った。それは社会的・政治的出来事および社会学者の生活経験によって根絶された。いかなる集団に所属する人間に算えられようとも、社会学者は今日いまだに誰もドイツ社会学のイデオロギー的局面の中で社会学者を支配したという社会的確信をもって研究し思考した者はいない。
- (49) H. Schelsky, a.a.O. S. 42.
- (50) H. Schelsky, *ibid.*
- (51) H. Schelsky, *ibid.* 具体的には、例えば Eugen Rosenstock Huessy や Hendrik de Man による *Werkstattaussiedelung*, 1922. なお H. de Man はベルギー人で主著に *Die Intellektuellen und der Sozialismus*, 1926. *Antwort an Kautsky*, 1927 がある。その他 Goetz Briefs, *Betriebssoziologie*, in A. Vierkandt (Hg), *Handwörterbuch der Soziologie*, 1931. *Betriebsführung und Betriebsleben in der Industrie*, 1934.
- (52) H. Schelsky, *ibid.*, S. 1. 具体的にはオランダの S. R. Steinmetz と F. Tönnies, L. von Wiese, H. Freyer, G. Ipsen などを挙げている。
- (53) H. Schelsky, *Rückblicke eines "Anti Soziologen"* 1981. S. 17.
- (54) R. König, *Deutsche Soziologie vor dem Nationalsozialismus*, in *KZfSS* 36. 1984. S. 2.
- (55) R. König, (10) a.a.O. Vorwort. In eigener Sache, S. 1.
- (56) R. König *ibid.*
- (57) R. König *ibid.*
- (58) Urs Jaeggi, *Geist und Katastroph, Studien zur Soziologie im Nationalsozialismus* 1983.
- Helmut Berking, *Masse und Geist, Studien zur Soziologie im Nationalsozialismus*, 1983.
- (59) R. König, (10) a.a.O. S. 392.
- (60) Otthein Rammstedt. *Theorie und Empirie des Volksfeindes. Zur Entwicklung der »Deutschen Soziologie«* in Peter Lundgreen (Hg.), *Wissenschaft im Dritten Reich*. 1985.
- (61) Rainer Waßner, Andreas Walther und das Seminar für Soziologie in Hamburg zwischen 1926 und 1945, *Eine wissenschaftsbiographischer Umriß*, in Sven Papeke (Hg.), *Ordnung und Theorie*. 1986. S. 410.
- (62) R. König, (10) a.a.O. S. 393.
- (63) R. König, a.a.O. S. 394.
- (64) D. Käsler, a.a.O. S. 96f.
- (65) R. König, a.a.O. S. 413.
- D. Käsler, a.a.O. S. 96.

(すずき ゆきとし, 本学学科主任教授)